

檜垣先生（以下H）：土井隆義先生が『アキハバラ発〈00年代〉への問い』（大澤真幸編・岩波書店）に書いていましたね。派遣労働者であることの理不尽さは我々にも納得できるものなのですから、厚生労働省とかに突っ込むならまだしも、なぜ「誰でもよかった」のか。彼のこうした考えはある種の必然であり、原因は我々の側にあるのではと思われました。彼はよく言われるようにコミュニケーション能力が欠如していたわけではなく、ネットの中で築き上げた親密なコミュニケーションにおいてはちゃんと認められたいと思っていた。ただし、この「親密なコミュニケーション」の外にいる人はただの「物」なので「誰でもよかった」というわけです。彼をああい風に追い込んだのは、デモのように公的に訴えることをしなくなった我々ではないか、というように本全体を通して思い知らされました。

増田さん（以下M）：連休中に渋谷のデモに参加してきましたが、確かに何と言うか社会見学のようなつもりでしたね。どんなものなのかなど。

H：ほう。授業料の値上げなんかが起こっても最近ではデモなどの行動が起こらない、何も言わないというのは、言っても何も変わらないということもあるのでしょうか、親密圏のコミュニケーションしかしておらず、そこでしか発言しないという傾向が関係しているのでしょうか。ああい事件が起きると「仲間を大切に」ということが対策として言われがちですが、仲間を大切にすることはもう十分しているでしょう。むしろそれを壊してでも公的に発言をすることが必要だと思います。リスク社会の影響なのかもしれませんが、危機管理委員会が流行っていますよね。防衛に防衛を重ねる息苦しさ、公的な発信をすることがない。極論すればそれが彼を追いつめた理由ではないかと。

菅崎さん（以下SU）：公的な発信の仕方がわからないというのは当たっていると感じました。

M：でもやはり彼が派遣労働者であったことが原因ではないのでしょうか。

H：派遣であったことは確かに一番の要因だったでしょう。彼が正社員なり公務員なりしていれば違った事態だったかもしれない。ただ原因として公的な発信の欠如ということもあったのではないかと。増田さんはなぜデモに参加してきたんですか。

M：春休みに一ヶ月ほどドイツに行っていたので、最近の日本の文脈が追えなくて。向こうでも日本のツイッターとかは読んでいたんですが。

H：自分の中でのつながりをつけるためにという感じですか。

M：そうですね。場所を見つめにくい感覚はあったと思います。ただ参加していたメンバーなんですが、僕より上の年齢の人がほとんどでしたね。渋谷の若者は「うぜー」みたいな感じで見ていましたし。

H：前から思っていましたけど、そこが問題なのでしょうね。ただだからといってグルになってみんなでやれと言うわけではないんです。かつての学生運動のように流れに翻弄されてということもあるでしょうし。その都度その都度公的に表明することが大事ということ。

M：デモの声は公なんですか。

H：そうですね。

M：僕もそうですけど、なんていうかお祭りみたいな雰囲気でした。DJがいて踊ったりして「楽しそう」と参加する人がいたり。

H：まあそれでも必要だとは思いますが。今の件について思うことはありますか、安西さん？

安西さん（以下A）：デモは東京に行くと見る機会もありますが、確かにお祭りみたいですね。

H：主張は要所要所すべきというほうについてはいかがですか。

A：そうだろうと思います。

H：栗原さんはどうですか。

栗原さん（以下K）：僕個人がそういうデモみたいな集まりが好きではないので。一つの意見を掲げた数の暴力に思えてしまいます。

H：今ポイントにしたいことはデモをするかどうかではないのですが。

K：ではそれは置いておくとしても、自分の意見を公的に表明すると言われてても、一体どうやってやるのかと思います。

H：自分がどうしたいのかをその都度発信するということでしょうね。何をどこでどれだけかということが一番難しいのですが。想田さんはどう思いますか。

想田（以下SO）：公的な発信の代わりに親密圏を拡大することで何とかしようというのが「思いやり駐輪」のような看板なのでしょうね。あの看板に違和感を覚える人も少ないようですし、もしかしたらそれでも良いのかなと考えています。

H：私が言いたいことから完全にポイントがずれていますよ。本当に極端な話、ああいう看板が秋葉原の事件につながったのではないかとっているわけですから。

SO：それはわかっていたつもりだったのですが。いやでもやはりわかっていないです。ああいう看板は、一応看板ですし、公的に発信しているとも言えるのではないのですか。先生はどういうものを公的な発信だと考えているのでしょうか。

H：あの看板は公的に発信するものではないでしょう、と私は敢えて言いたいです。背景に何も見えないのに、感情という個人的なものが無責任に大学という公の場所にぽんと設置されていることが問題なのです。公的な発信とは、責任の所在をはっきりさせて自分個人の考えを外に向かって発言することです。

SO：そこがすこし引っかけます。確かに親密圏の内と外という分け方はよくないでしょう。ただ、問題を解決しようとして、親密圏と公共圏のように分けて考え公共圏での発信の機会を増やそうとしてもダメなのではないかと。結局親密圏を拡大して察することができる人数を増やすにとどまるのではないのでしょうか。必要なことはある意味親密圏の破壊です。「親密圏内は仲間で外は物」と考えていたとしても、自分に都合のいい「トモダチ」という名の「物」に囲まれているわけですから、親密圏にとどまる限り追い込まれるでしょうし、公的な発信も叶わないと思います。ですから、親密圏ににいるような身近な人をも公的に見なすこと、つまり、親密圏を維持して公的な発信をするのではなく、そもそもなるべく親密圏を形成させない方向に持っていくことが必要なのではと思います。

H：そういうことならその通りでしょうね。石田さんはどう思われましたか。

石田さん：そうですね。公的な発信が大切だと言うのはわかりますが、じゃあ公的に発信する空間を作ろうということになっても無理ではないかと。それこそ祭りの空間になってしまうでしょうね。

H：僕もデモのようなことは基本的には反対なんです。個人として公的に発言することが大事だと考えていますから。ただ人間は弱いですから、時にはグルになったりお祭りになったりすることで垣根が低くなるのなら、それもありなのかなと思うようになった、という感じです。全体を通して何か言っておきたいことや確認しておきたいことはありますか。

SU：公的というのは言う内容なのでしょうか言い方なのでしょうか。

H：言う態度だと思いますね。発言内容を一部の人には隠そうとするのではなく、できるだけ多くの人に公にしようとして、反論があつたら受けて立つ覚悟があればいいでしょう。思いやり駐輪であっても、例えば想田さんがその看板を持って発言するのなら公的なんです。看板の形で大学にあるからよくない。日本には発言内容で公的と私的を分ける傾向がありますが、それが諸悪の根源というか個人を大切にしていない姿勢だと思います。「公的」はドイツ語で öffentlich ですが、これはオープンである、すなわち反論する余地があるということです。オープンであるということが責任を持って話しているかどうかの基準であるとも思いますね。